

## 年頭のごあいさつ

林産試験場長 鈴木道和

2021年を迎え、謹んで皆様へ新年のご挨拶を申し上げます。

旧年中は、皆さま方には多大なるご理解ご協力をいただき、心からお礼申し上げます。

昨年は、林産試験場にとりましては創立70周年の記念すべき年となりました。ひとえに、道内の林業・木材産業に携わる方々、北海道庁や市町村、林野庁、国立研究開発法人森林研究・整備機構など皆さまのご支援ご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

昨年1月中旬、日本国内において新型コロナウイルスの感染者が初めて報告されてから、間もなく1年となります。2月下旬には全国に先行して北海道独自の緊急事態宣言が、その後、全国規模での緊急事態宣言が発出され、いったん落ち着きを見せたものの、10月中旬以降、再度全国的に感染者数が増加し、いまだ収束を見通せていません。林産試験場の様々な試験研究業務においても、道内各地での調査や打ち合わせといった現場や対面での活動などに影響を及ぼしているとともに、皆さまからの技術支援や視察・見学等の依頼も一部でお断りさせていただくなど、大変ご迷惑をおかけしている状況にあります。

こうした中で、林産試験場の敷地内に建設されたCLT実験棟「Hokkaido CLT Pavilion」が、日本木材青年団体連合会主催の第23回木材活用コンクールにおいて優秀賞を、また、木材利用推進中央協議会の令和2年度木材利用優良施設コンクールで審査委員会特別賞を、さらには、2020年度グッドデザイン賞とウッドデザイン賞2020をも受賞するなど、これまでの間、道産カラマツ・トドマツによるCLT（Cross Laminated Timber、直交集成板）建築物の実用化を目指してきた研究に対し、一定の評価をいただいたものと思っております。道内でも、CLTを活用した建築物が徐々にではありますが増えてきています。引き続き、道産材によるCLTが一層普及するよう、生産性向上や接合技術の開発などに向けた研究を進めてまいります。

また、木質バイオマス関係では、シラカンバを原料とした黒毛和牛向けの粗飼料を開発し、輸入粗飼料よりも嗜好性が高く、枝肉の重量を増加させる結果が得られたことから、この研究成果を活用したシラカンバ粗飼料の商業生産が道内で始まりました。さらには、きのご関係では、アレルギーや設備汚染の原因となる胞子をほとんど作らず、かつ、高機能性を有する成分を多く含むタモギタケの新品種を開発し、種苗登録されるなど、林産試験場では幅広い分野にわたる試験研究に取り組んできたところです。

道内の人工林資源が本格的な利用期を迎えている中、世界的に国連の持続的開発目標であるSDGsの達成に向けた取り組みが活発化しています。これと呼応するように、国内では、木造・木質構造を取り込んだビルなどの開発が増えてきており、まさに都市の木造化が進み始めています。また、昨年10月には、政府が温室効果ガスの排出量を2050年までに実質ゼロにする方針を表明しました。森林だけでなく、二酸化炭素を貯蔵・固定する木材・木製品が果たす役割は今後ますます重要になるものと思われれます。

一方で、本道においては人口減少や少子・高齢化が加速し、労働力不足が深刻化しているとともに、ICTやIoT、AIといった急速なデジタル化が進展しており、社会的・経済的・技術的基盤が大きく変化しています。加えて、依然として猛威を振るう新型コロナウイルスが収束した後は、企業活動をはじめ、人々の生活様式や働き方なども大きく変貌すると思われれます。林産試験場も、こうした変化に的確に対応していくため、変えるべき点は変え、スピード感をもって諸課題に立ち向かい、本道の林業・木材産業の振興や地域の活性化につなげていく必要があると強く感じております。

2021年はどのような1年となるのでしょうか。無事、新型コロナウイルスのワクチンが普及し、効果のある治療薬が生まれ、世界経済が正常化することを願うばかりです。林産試験場としては、創立からの70年間の財産を糧に、新たな時代に挑戦してまいりますので、本年も変わらぬご支援ご協力を頂きますよう心からお願い申し上げます。

そして、本道の森林・林業・木材産業の一層のご発展を祈念し、新年のご挨拶といたします。

